

抗菌薬販売量モニタリングの都道府県別データ公開！

静岡県立静岡がんセンター 薬剤部 望月 敬浩

2018年4月3日に国立国際医療研究センター病院 AMR 臨床リファレンスセンターより、都道府県別抗菌薬販売量集計データが公開されました¹⁾。ヒトに対する抗菌薬だけでなく、ワンヘルスの概念から動物用抗菌薬まで多くのデータが公開されています²⁾。2016年の県別抗菌薬販売量のデータを図1および表に示します。あくまで販売量のデータであり、通報15で紹介したレセプト情報・特定健診等情報データベース(NDB)による集計データとは多少異なります。当然のことながら、使用量より販売量の方が相対的に大きくなります。

※抗菌薬使用量の集計単位について(通報15の記載を引用)³⁾

今回用いている単位: defined daily doses (DDDs)/1000 inhabitants/day (DID)は、WHOの推奨する医薬品使用量の集計単位です。DDDとは薬物ごとに設定された基準値(例:レボフロキサシンのDDDは500mg)であり、この基準値により補正することで常用量の異なる薬物の比較が可能となります。

DID(四分位数)

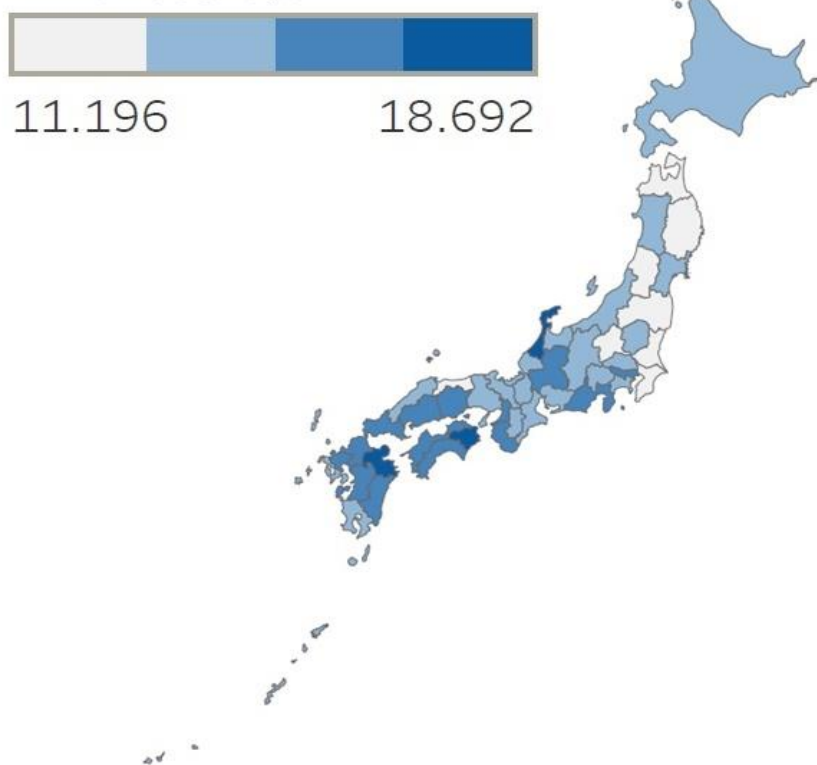


図1 2016年の都道府県別抗菌薬販売量

表 2016年の静岡県と日本の抗菌薬販売量の比較

	静岡県	日本
合計	15.0	14.7
第3世代セフェム	3.3	3.5
マクロライド	5.1	4.6
キノロン	2.9	2.8

単位: DDDs/1000 inhabitants/day

2016年の静岡県の抗菌薬販売量は、国内の都道府県別では、17番目に多いという結果でした。もちろん使用量(販売量)が多い=悪、使用量(販売量)が少ない=善とは限らないため、他県より販売量が多いことに一喜一憂する必要はありません。一方、AMR 対策を推進していくうえで、私たちは、直接的に微生物の感性率または耐性率に手を加えられるわけではありません。できることは、薬剤耐性菌を広げないための感染対策や、薬剤耐性菌を出現させないための抗菌薬適正使用となります。後者については、抗菌薬の使用状況をコントロールすることが私たちにできることとなります。薬剤耐性菌拡大の背景として、抗菌薬の不適切な使用等が指摘されています。抗菌薬の不適切な使用等が抑制された結果として、販売量や薬剤耐性菌の低下につながっていくことを継続的にモニタリングしていく必要があります。

AMR 臨床リファレンスセンターから、定期的に抗菌薬販売量データが公開されるため、今後もその中から静岡県に関する情報をフィードバックしていく予定です。

【参考文献】

1) 都道府県別抗菌薬販売量サーベイランス

<http://amrcrc.ncgm.go.jp/surveillance/index.html>

2) 薬剤耐性 AMR ワンヘルス動向調査 2017 年度レポート 抗菌薬の推移

https://amr-onehealth.ncgm.go.jp/statistics_cat/antibiotic/

3) 通報 15: 抗菌薬使用量モニタリング

* 追加(本康医院 本康宗信): 販売量=使用量ではありませんが、このデータには販売された抗菌剤の種類割合も示されています。当院での抗菌剤処方を受診件数の 1.3%程度ですので、規模は違いますが、割合を比較してみました(図 2)。全国、県の集計と比して、市中感染が多い診療所では、ペニシリン系が多く、セフェム系、キノロンが少ないことが分かります。

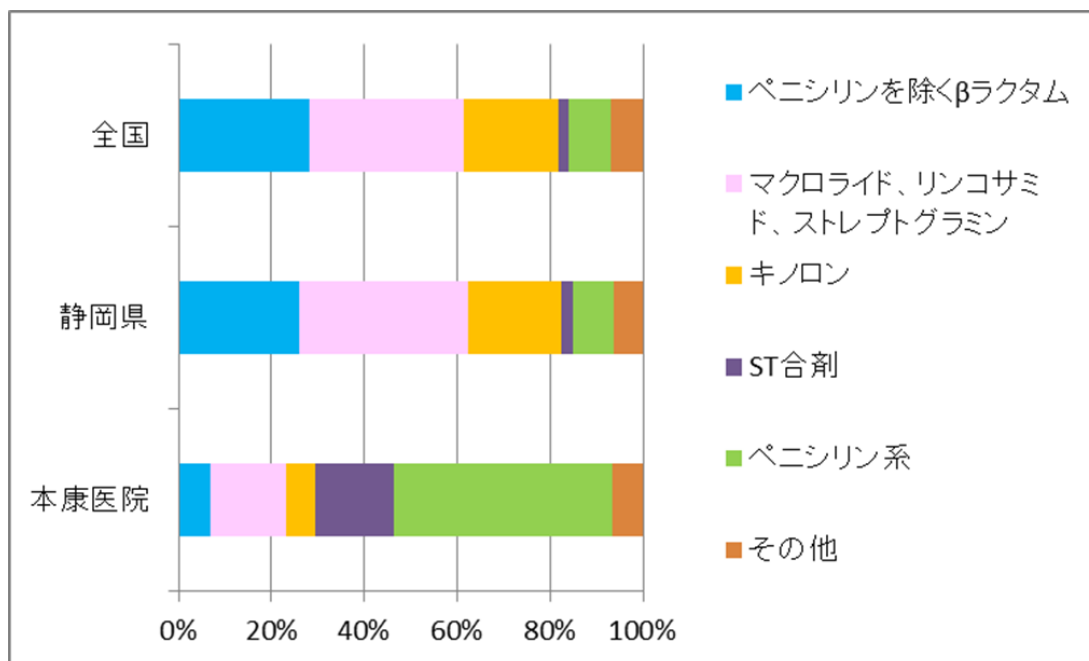


図 2 2016 年抗菌薬投与割合の比較